

## <評論> 易化

リード文でキーワード「レジリエンス」が示してあるため、とっつきやすい。本文では概念を導入した後、時系列に沿ってこの概念の発展を述べ、それらからレジリエンスという概念の特徴を導き、最後にその特徴を福祉へ応用する観点から論じる構成となっている。

段落の役割は以下のようになっている。

1～3段落 「レジリエンス」の導入と定義

4～11段落 「レジリエンス」の歴史的な発展

12～14段落 「レジリエンス」の特徴と福祉への応用

設問は全体的にボリュームが少なく、特に問4の検討要素が少ない。取組みやすく感じた受験生も少なくなかったと考えられる。

問1 漢字は全て基本的

問2 3～6段落のまとめ

問3 7～11段落のまとめ

問4 12～14段落のまとめ(問2、問3を踏まえて)

問5 本文の趣旨

穴埋めタイプは一昨年ぶり。本文を理解して適切な具体例を選ばせる問題。

正解選択肢の具体的な状況を本文中の言葉で抽象化できれば簡単に正解が選べる。

「新チーム」=環境の変化、「現状に合うように工夫」=環境への適応、

「目標に向けてまとまり」=ニーズの充足と読み換える。

問6 例年通り本文の表現と構成

## <小説> 昨年並み～易化

国語の小説問題はあるイベントを通して筆者の心情の変化を捉えることが重要だと強調してきた。本年度の問題では「妻の死後届いた、川瀬成吉(魚芳とも呼ばれる)の死を伝える手紙」が契機となって、この成吉(魚芳)も妻もいた頃の生活の回想が始まる。この回想のなかでの心情を追えば良い。人間関係を掴むのに苦労しなければすぐ正解にたどり着けると思われる。

問1 語句の意味

問2 情景描写の説明

冒頭～傍線部の内容把握、「暗い、望みのない明け暮れ」=前2行の戦況の悪さを指している、また、「じっとうずくまったまま」や「回想」などという言葉から亡き妻と過ごした過去に心が向いていることがわかる。

問3 ずっと続くと思われた和やかな情景が、戦争によって次第になくなり、45行目では「憂鬱の影がだんだん濃くなって」行く様子を抑えるのがポイント。正解以外はどれも的外れ。

問4 魚芳のエピソードからその人柄を抑える。89行目の「久しぶりに訪ねてきても遠慮して～」もヒントになる。

問5 本文全体の魚芳のエピソードと筆者たちからの評価を踏まえる。84行目以降、回想から現在にもどったところで筆者の思いがまとめられている。

問6 表現に関する問題